

は、うぬ。

「本稿は第31回新人シナリオコンクール」において最終選考まで残った作品を、月刊『リオ』2022年5月号にて掲載されており、拙作についての審査員の方々からいただいた選評をもとに、改稿したものです」

登場人物

高倉静真―焼鳥屋「バラック」店員

吉沢早智―アイドルグループ「エンジェルス

のメンバー

市川美子―右同

杉原香奈―右同

松園翠―スナック「ディアナ」のホステス

佐村次郎―バラック店主

佐村琴絵―次郎の妻

花村浄雲―僧侶

花村浄悠―僧侶、浄雲の子

岡崎―エンジェルスマネージャー

西島―タクシ―運転手

翔太―大学生

結衣―右同

その他

○走る京福電車

鳴滝〜宇多野間、線路両脇に樹つ櫻が満開に咲き誇る中を走っていく京福電車。

○メインタイトル

《ウエストロード・ラブストーリー》

○京都市内・西大路通り

春。袈裟を着た若い僧侶が原付バイクを西大路通りを南へ走らせている。東西に走る三条通り、六角

通りを過ぎて左に折れるバイク。

○焼き鳥屋（バラック）外景
古ぼけた看板の出ている焼鳥屋（バラック）。その店先でバイクを停める僧侶。

○前同・二階・六畳間

小さな座卓の前に袱紗に包まれた骨壺と、その横にお守りが置いてある。

隣の小さな写真立て。微笑んで映る若い男女の写真。

その前で読経をしている花村浄悠（28）。

後ろで正座している佐村次郎（69）と妻の琴絵（67）。

× × ×
読経を終え、夫妻に向き直る浄悠。

次郎「すまんかったなボン、おおきに」

琴絵「どうぞ、お納めください」

お布施を差し出す琴絵。

浄悠「ありがとうございます」

お布施を懐にしまう浄悠。

次郎「浄雲は相変わらずの不養生か」

浄悠「はい。痛風治す気いなんか全然ありませんわ。足痛い、足痛い言いながら焼肉やら唐揚げやら豚キムチやらワシワシ食うてます。食べて免疫力つけて疫病撃退じゃ、いうて」

次郎「アホもそこまでいったら立派なものやな。よう長年坊さんやっとなる」

浄悠「ほんまに、わが親ながら」

笑う三人。

浄悠「まだ、納骨されしませんのですか」

次郎「ああ、うん」

浄悠「父からお聞き及びや思いますが、うちのお寺、二年前から無縁の仏様のお骨、納めさせてもろてます。父の親友の佐村さんにご縁のあった方です。静真さんのお骨、そろそろお納めされてはいかがですか」

次郎「ボンが言い出して始めたそうやな、それ」

浄悠「はい」

次郎「立派な心掛けや。浄雲の息子とは思えんわ。おおきに。いずれそうさせてもらおうつもりや。けどまだ、わしらが元気でいるうちにはな」

琴絵「うちの喘息、静真ちゃんがあつちを持っていつてくれた。おかげで二人して働けてる。その時が来たらお願いするわな」

浄悠「はい、いつでもおつしやってください——けど、静真さん二十七やなんてねえ」

次郎「ああ、ほんまになあ」

浄悠「今の僕より若かったんやなあ」

涙を拭う琴絵。

琴絵「ほんまに、ええ子やった。何年経つても思いださへん日いなんかない」

浄悠、壁に貼られた三人組のアイドルグループへエンジェルズとそのメンバー吉沢早智のポスターを見る。

浄悠「親父から、静真さんと早智さんのこと、いろいろ聞いてます」

次郎「早智ちゃん、何回かここ来た事ある。静真もときどき東京に会いに行ってた」

浄悠「遠距離恋愛いうやつですね」

琴絵「パーっと花が咲いたみたいな顔で笑う子やった。気さくなほんまにええ子やった」

次郎「静真に教えてもろて仕込みの串打ちもしてたんやで。ええ筋してたわ」

浄悠「はあ、エンジェルズのサチが」
次郎「早智ちゃんが斃れたって母親から連絡があつて、あいつすぐ東京に行つた。手の施しようがない状態やつて、あいつから電話があつてなあ。あいつな、早智ちゃんから離れたあないつて言うたんや」

浄悠「どない言わはったんですか？」

次郎「そこにおれつて、言うたよ。それから静真、早智ちゃんの実家に寝泊まりして毎日病院通つたんや」

すすり泣く琴絵。

次郎「一週間も経たんうちやつた。早智ちゃん、両親と、美子ちゃんと香奈ちゃん、静真に看取られて、なあ……」

●インサート・△△病院・個室

酸素マスクをつけベッドに横になつている早智。今わの際。強くその両手を握つている静真。ベッドの周囲にいる美子、香奈、早智の両親。早智、静真を見る。一瞬笑つたよう。事切れる早智。早智の胸に顔をうずめる静真。うずくまる母親。うなだれ涙する父親。早智の名を呼びベッドに駆け寄る美子と香奈。

○前同・二階・六畳間

浄悠「静真さんが亡くなられたのは？」

次郎「それから一年過ぎたころや。店閉めて、

暖簾持つて入つたときに倒れたみたいや。

次の日の朝にわしが見つけた」

●インサート・へバラック〜店内(夜)

暖簾を手に持ち、倒れている静真。死んでいる。

○前同・二階・六畳間

次郎「わしが早う帰らんやつたら、なんとかなつてたかも分からん——それを思うといまだに悔しいてな」

浄悠「いや、それは」

泣き続けている琴絵。

琴絵「再発した脳腫瘍とくも膜下出血。同じ頭の病氣。ほんまに仲のええ二人やわ」

次郎「早智ちゃんが静真呼んだんかな、とかな——そんなん思うのはアカンことか、ボン？」

しばしの沈黙。

浄悠「僕もね、はまつてしもうたんですよ、エンジェルズ」

次郎「え？」

浄悠「ほら、今はパソコンやスマホでなんぼでも昔の映像観れますから」

次郎「ああ、なるほどな」

浄悠「歌もダンスもすごい。ほんまに伝説のアイドルグループや。ついこの前五枚組のブルーレイボックス買ったんですわ」

次郎「ははは。ええお布施の使い方やな」

浄悠「おとつい嫁さんといっしょに観たんです、横浜スタジアムのラストコンサート四時間半のやつ。嫁さん感動してましたわ。『今のアイドルとレベルがちがう』いうて」

次郎「かわいいやろ、早智ちゃん」

浄悠「はい。僕もサチちゃん推しですわ」

次郎「ええんか、そんなこと言うて。嫁さんに怒られるぞ」

浄悠「それは別腹ですわ。けど二十五かあ」

次郎「なあ。ほんまになあ」

浄悠「今でも、ご命日にはファンがお墓に大勢集まるそうです」

琴絵「早智ちゃん死んでからの一年、静真ちゃんどんな気持ちで生きてたんやろうなあ」

骨壺と隣のお守り、写真の二人を見る三人。

○焼き鳥屋（バラック）・外景

テロップへ1984年・春

【準備中】の札が出ている。

○前同・店内・厨房

カウンター七席と二人掛けテーブル席四つの小さな店。店主の次郎（32）と二人で仕込みをしている高倉静真（19）。

焼き鳥を串にさしている静真。左手の小指、爪の下から指の下まで、幅三ミリほどの朱色の痣が走っている。

黙々と仕込みを続ける二人。

× × ×

夕方からの開店。客が次々とやってくる。焼き鳥を焼いている次郎。

それを客の前に出すのは静真。二人忙しく働き続けている。

× × ×

閉店。帰宅しようとしている次郎。二人向かい合って。

次郎「そしたら戸締り、火の元、頼んだで」

静真「はい」

次郎「静真」

静真「はい」

次郎「明日からおまえが焼きや」

静真「え」

次郎「串打ちの三年は済んだ。俺も四年目から焼き任された」

ニヤッと笑って静真を見てから店を出ていく次郎。

じっと立っている静真。やがて二階への階段を上っていく。

○前同・二階六畳間（夜）

殺風景な部屋。カンカンと響く踏切の音。電気を点け、窓を開ける静真。京福電鉄の一両電車が通っていくのをじっと見る。

電車が行き過ぎてしまい、窓を閉める静真。服を脱ぎ、ランニングシャツとブリーフ一枚になり、床に畳んでいた布団を敷く。電気を消し、寝床に入る静真。

○（バラック）店内

店内の掃除をしている静真。買い物袋を提げて入ってくる次郎。

静真「おはようございます」

次郎「ああ、おはよう。静真よ」

静真「はい」

次郎「西院の駅前でこんなもん配ってたわ」

静真にチラシを手渡す次郎。ミニスカートの子三人が横並びで立ち、肩に手を置いて片足上げのポーズを決め微笑

んでいる写真のチラシ。へエンジ

エル

スへのロゴが大きく。

静真「なんですか、これ」
次郎「三時から三条会館の駐輪場で歌うんやつてよ。書いたあるやろ」

またチラシに目を落とす静真。

へ本日京都キャンペーンツア
ー!の文字が目に入る。

静真「駐輪場って、自転車か」

次郎「定休日や。有名なんか? そのエンジンジェルス云う子ら」

静真「さあ。そういうの、詳しいないから」

次郎「パチンコ屋の駐輪場で歌うくらいや。たかがしれてるなあ」

静真「はあ、そうですね」

次郎「行つたらどないや」

静真「え」

次郎「かまへん」

静真「ええですよ。こんな興味ないですし」

次郎「すぐそこやないか。暇つぶしに行つてこい。仕込みは俺一人でやつとく。

可愛いねーちゃんのアンヨ見てこいや。

パンツも見えるか分からんぞ」

屈託なく笑う次郎を複雑な顔で見る静真。チラシを見る。微笑み浮かべている左端の女の子をじっと見る。

○三条会館・駐輪場

小さな演台が組まれている。その前に集まって立っている三十人ほどの観客。その中に静真もいる。

駆け足でステージに登場するヘンジェルスの三人。フリフリ衣装にミニスカート姿。センターに

市川美子(19)向かって右に杉原香奈(19)。左に吉沢早智

(19)。三人、観客に向かつて。

美子・香奈・早智「みなさん、こんにちはー!」

まばらな拍手。

美子「市川美子、ミコです!」

香奈「杉原香奈、カナです!」

早智「吉沢早智、サチです!」

美子「三人そろって——」

美子・香奈・早智「へエンジェルスです!」

美子「聴いてください! わたしたちのデビュー曲、『ラッキーガールにご用心』!」

イントロに続き、唄い、踊りだす三人。左端の早智から目を離せないでいる静真。

× × ×

ステージが終わり、駐輪場を出ていく観客たち。三人が、画板を肩掛けにして呼びかけている。

美子「ファンクラブ、入ってくださいーい。

千円で入れます」

香奈「特典いっぱいあります」

早智「今日入会された方は、永年会員です」

呼びかけ続ける三人。立ち止まって早智を見ている静真。早智、静真に気づく。静真を見て。

早智「ファンクラブ、入っていただけませんかっ!」

静真「あ、はあ……」

早智の前に立つ静真。

早智「ありがとうございます! うれしいです!」

静真「あ、はい……」

早智に千円を渡し、画板に置かれた紙に、氏名、住所、年齢、電話番号を書いていく静真。それを早智、じつと見て。

早智「焼き鳥屋、バラック……そこがお家?」

顔を上げる静真。早智を見る。微笑んで静真を見ている早智。

静真「あ、いや。住み込みで。その二階に住まわせてもらってます」

早智「じゃあわたしといっしょだよ」

静真「え」

早智「わたしも、社長の家の二階に住まわせてもらってるの」

静真「そうなんや」

早智「そうなん」

早智、おかしな関西弁の発音で。

早智「十九歳か。私たちと同年だね」

静真「そうなんや」
早智「そうなん」

笑う二人。

早智「これからもエンジェルスを応援してください！ えっと……高倉静真さん！ はい、両手で握手！」

両手を差し出す早智。右手出した後、おずおずと左手を差し出す静真。

早智、その時に静真の左手指の痣に気づく。それを察する静真。早智を見る。

早智「いっしょだ」

静真「え？」

早智「普段はファンデーションで隠してる

んだけどさ」

ハンカチを取り出し、それで右手小指を擦る早智。爪の下から幅二ミリほどの赤い痣が、指の下まで走っている。

早智「生まれつきなの」

静真「ほくも」

早智「わたしの方がちよつと赤いね」

静真「ほくの方がちよつと長い」

二人、見つめあつて。

早智、差し出された静真の両手を強く握る。

○西大路通り・歩道

丸めたポスターを手に歩いていく

静真。

○へバラック〈二階・六畳間

三人の直筆サインが書かれたエンジェルスのポスターを壁にピン留めする静真。それを見やる。微笑む早智をじつと見つめる。

○へバラック〈店内（夜）

営業中。テーブル席に二組の客。厨房の中にいる静真と次郎。鶏を焼いている静真。

次郎「かわいかったか」

静真「え」

次郎「そやからなんたらつて云うアイドルのグループよ」

静真「はあ、まあ」

次郎「パンツ見えたか」

静真「見えませんよ、そんなん」

次郎「ははっ、そうか。どの子がいちばんかわいかった？」

静真「どの子って」

次郎「帰ってきてからなんとのうポーっとしとる、おまえ。三人の中でどの子がいちばんよかった？」

静真「――早智って子がかわいかったです」

次郎「はははっ、そうか。早智ちゃんか。

なあ、見に行つてよかったやろ」

無言で鶏を焼き続ける静真。

扉が開く。

次郎「はい、いらっしやい」

入ってきたのは常連客の松園翠（27）。カウンター席に座る。

翠「うちはチーママ。静真ちゃんはチー大将。なー」

次郎「なんや、それ」

翠「焼き任されたちつこい大将、チー大将や。なー」

静真、焼き台の上に手羽先を四つ置いて行く。

翠「チー大将の童貞、うちがいつでも貰たる

で」

次郎「翠ちゃんのつけ入るスキはない。

こいつはいま早智ちゃんとやらに夢中や」

翠「ええっ、誰それ！ 静真ちゃん好きな女の子で来たん！？」

色めきたつ翠。

静真「そんなやないですよ。やめてください、ほんまに……」

次郎「すまんすまん、いちびりすぎた」

翠「えー、早智ちゃんてだれー。気になるわあ。教えてよ静真ちゃん」

無言で手羽先を焼いていく静真。

○西大路通り・歩道

買い物袋を籠に入れ、自転車をこ

い

でいる静真。

三条会館の前で立ち止まる。自転車でいっばいの駐輪場を見る。

●静真の回想

手を握り合っている静真と早智。

早智「こんな痣、わたしだけだと思ってた」

静真「——うん、ほくも」

二人、固く両手を握り合って。

(回想終わり)

静真、歩き出す。

○へバラックへ裏

排水溝の清掃をしている静真。溜まったヘドロを掬い取り、ポリバケツのビニール袋に移し替えている。

○へバラックへ店内(夜)

営業中の店内。カウンターに僧侶、花村浄雲(32)。上下スウェット姿で飲んでいる。

焼き台の前で鳥を焼いているのは静真。厨房の中、次郎がコップ酒を傾けながら、浄雲と競馬談義をしている。

浄雲「あー、それにしても桜花賞のダイアナソロンにはやられたわ」

次郎「そやから言うたやろ。田原買わなあかんって。今いちばん乗れてるんやから」

浄雲「今週のダービーは？ ジロちゃん」

次郎「皐月賞といっしょや。シンボリルドルフで鉄板。あれはモノが違うで」

浄雲「ミスターシービーと比べたらどうや？」

次郎「ルドルフが上やろな」

浄雲「ほんまか？ そしたら二年連続三冠馬が出るって？」

次郎「やろうな」

浄雲「あるかあ、それ」

次郎「ある。大ありや。あれは名を残す

馬や」

次郎、振り返って静真に。

次郎「一本出してみたい」

静真「あ、はい」

静真が差し出したモモ串を手にし、しばらく見ている次郎。口に運んで。

次郎「ルドルフも四歳、おまえもここに来て四年目やな」

静真「はい」

次郎「ようここまで来た」

静真「ありがとうございます」

浄雲「ほな、バラックのシンボリルドルフやな、静真ちゃんは」

次郎「焼きは一生やぞ、静真。性根入れろよ」

静真「はい」

浄雲「なあ、静真ちゃんがルドルフやったらジロちゃんはなんや？」

次郎「俺か。俺はシンザンや」

浄雲「また古いなあ、おい」

次郎「生まれ生臭坊主」
浄雲「祇園でお茶屋遊びもできん貧乏寺の住職に、それは言うたらアカンで、ジロちゃん」

笑う次郎と浄雲。静真も笑顔を見せる。

○へバラックへ表

おかもちを手にして出てくる静真。

○路上

京福電鉄線路沿いの路を歩いて行く静真。踏切までくる。遮断機が下りている。通過する一両電車。遮断機が開き、踏切を渡る静真。六角通りをまっすぐ歩いて行く静真。

○へあかつきハイツへ下

二階建てのアパート。外階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前

ブザーを押す静真。

少しの間の後、出てくるTシャツ、
ホットパンツ姿の翠。

翠「ごめんな、営業時間やないのに。入
って」

中に入る静真。

○前同・玄関

男物の靴が脱がれてあるのをチラ
ツと見る静真。奥から聞こえるテ
レビの音。おかもちを置き、ラッ
プをかけた焼き鳥の乗った皿を取
り出していく。五つ並ぶ皿。

翠「モモやらツクネやらしようもないや
ろ。うちがしっかり舌の教育したらな
あかん思ってるねん」

静真「はあ」

翠「静真ちゃんが焼いてくれたん？」

静真「あ、はい。師匠仕入れに行っ
てるんで」

翠「そうかあ。もう一人前やなあ」

静真「まだまだです——えっと、合計で
千五百六十円になります」

千円札二枚を差し出す翠。

翠「おつりはいらん、言うても受け取ら
んのやろうなあ」

静真「師匠にしかられますから」

用意してた小銭を翠に渡す静真。

翠「固いこっちゃ。そしたら、これはよ
うがんばってる静真ちゃんへのうちか
らのチップ」

五千円札を静真が着ている白衣の

胸ポケットにねじ込む翠。

静真「いや、こんなダメです」

静真、五千円札を翠に返そうとす
るが、翠、その手を押さえて。

翠「うちの気持ちや。ほんまに静真ちゃ
んよう頑張ってる。あんた見たらうち
も頑張らなって素直に思えるんや。女
の気持ちムダにするような男はカスや
で。よう覚えとき」

静真、翠をじっと見る。翠、目を
そらさない。

静真「——すみません」

翠「うん。大将には内緒やで。二人の秘
密や」

静真の唇に人差し指を当てる翠。
小さく頷く静真。

翠「ふふ。なあ、お酒飲めるようになって
た？」

静真「いえ、ぜんぜん」

翠「ほんまに真面目つ子やなあ。店おい
でとも言われへんやん」

笑う翠。

静真「すみません」

翠「いや、謝らんでもええけどやな」

翠の笑顔を見ている静真。

○へバラックへ二階・静真の部屋(夜)

部屋の電気をつけたまま、布団の
上でポーツと天井を見ている静真。
床に置いた小さなラジオから響く
ディスクジョッキーの声。

DJ「へはい、じゃあ次のリクエストま
いりましょう。京都市は右京区のペン
ネーム、バラックさんからのリクエス
ト、エンジェルズでデビュー曲『ラッ
キーガールにご用心!』」

ガバツと起き上がる静真。イント
ロが流れ出す。首を振りリズムを
取りながら、曲を聴く。壁のポス
ターを見る。早智を見る。うれし
そうに笑う静真。

○へバラックへ店内

準備中。仕込みをしている次郎と
静真。

黒電話が鳴る。受話器を取る次郎。

次郎「はい、へバラックです——え、

おりますが。あの、失礼ですがそちら
さまは——はい。じゃあ、換わります

——静真」

静真「はい」

次郎「おまえに電話や」

静真「ほくに？」

次郎「吉沢早智さんって言うてはる」

静真「は？ え？ なんですすて？」

次郎「そやから吉沢さんや。早よせえ」

静真、受話器を受け取り、耳に当
てる。

静真「あの、もしもし」

早智（声）「へ高倉くん？ あー、いたー、よかったー。すっごいドキドキしちゃった。エンジェルスの子です」

静真「え、あ、あの」

早智（声）「へごめんね急に。びっくりしたよね。わたし、ずっと控えて持ってたの、高倉君の住所と電話番号」

静真「持ってたって——」

仕込みに戻る次郎だが、静真の電話が気になって仕方がない。

○京都・四条河原町阪急百貨店・世界地

図の前

立っている静真に、二人の電話の音が重なって。

早智（声）「へ明日、会えないかな」

静真（声）「へいや、会うって」

早智（声）「へキャンペーンで大阪に来てるの。明日オフなんだ。三人で関西観光するつもりだったんだけど……」

静真（声）「へあ、あの」

早智（声）「へお仕事で、忙しいかな」

静真（声）「へいや、明日は定休日……」

早智（声）「へやった！ じゃあ会おうよ——」

静真（声）「へ——はい」

地下からの階段を駆け上がってきた早智が走ってくる。静真の前に立つ。

早智「待った、高倉君——」

満面の笑みの早智を呆然と見ている静真。

○四条河原町・交差点・横断歩道上

並んで歩いている静真と早智。

静真「あの、なんで」

早智「なんでって、なにが？」

静真「いや、だから……」

右手をかざし静真に見せる早智。小指の痣はファンデーションで隠していない。

早智「今日はわたしもこれにつこり笑う早智。」

○四条河原町の純喫茶・店内

テーブル席に座り、向かいあって座っている静真と早智。サンドイッチとミルクティーの早智。コーヒーの静真。

早智「聴いてたんだよ、あのラジオ」

静真「え」

早智「京都市右京区、ペンネーム、バラックさん」

静真「あ」

早智「キャンペーンるときはいつも三人いっしょの部屋で寝てるの。だから、みんなで聴いてた。すごく嬉しかった。

高倉君のこと、美子と香奈に話したの。高倉のこと忘れられないって、言ったの」

静真「——」

早智「そしたら二人、絶対会ってこいって。三人でどこか行くなんていつでもできるからって言ってくれてさ。だから、電話したの」

静真を見る早智。

早智「高倉君は、わたしに会いたくなかった？」

微笑んでいる早智を見る静真。

静真「会えるやなんて、思ってたへんかったし」

早智「でも、会えたやん」

早智、おかしなアクセントで。静真、笑う。早智も笑う。

早智「ねえ、どこ連れてってくれる？」

静真「え、どこって」

早智「デートなんだからエスコートしてよ」

静真「デート……」

早智「初デートだからね、わたし」

早智を見る静真。

静真「——じゃあ、映画、とか」

早智「『じゃあ』ってなによお。なんかやつつけー。とりあえず映画って言つてりゃいいって思っていない？」

静真「そんなこと、ない」

早智「ほんとに?」

静真「うん。絶対、ない。ぼく、吉沢さんと映画観たい」

早智、笑って。

早智「なに観よっか」

静真「いま、なにやってるんやろ」

早智「知らない。でも、ずっと覚えてるの観たい」

静真「ずっと覚えてるの?」

早智「うん。これからも観たことずっとずっと覚えてるの、そんな映画」

微笑む早智をじっと見る静真。

静真「新京極に、むかしの外国の映画やってる映画館、あったと思う」

早智「へえ! どんなのやってるの?」

静真「さあ。前、通りかかったことあるだけやから。映画とか詳しいないし」

早智「そっか。じゃあ、とりあえずそこに行ってみようよ」

静真「うん」

コーヒーをすする静真。

早智「はい」

サンドイッチをひとつさしだす早智。

静真「え」

早智「高倉くんもひとつ食べなよ」

静真「——うん」

サンドイッチを手に取り、口に運ぶ静真。

早智「おいしい?」

静真「うん」

早智「ふふふ」

笑う早智。

○新京極通り

並んで歩いて行く二人。

○前同・名画座の前

名画座の入り口に立つ二人。

早智「ここか。なんか普通の映画館と違って、レトロない感じだね」

受け付け横のショーケースに『冒険者たち』のポスターが貼られている。

早智「『冒険者たち』十時半からだって。

これ、観ようよ」

静真「うん」

受付前に立つ二人。

○名画座・劇場内

空席が目立つ劇場内で『冒険者たち』を観ている静真と早智。亡くなったジョアンナ・シムカス演じるレティシアが海中へ沈んでいく場面をじっと見つめる二人。早智の目から涙がこぼれる。気づく静真。

早智、静真の手を握る。驚き早智を見る静真。スクリーンを見つめたままにいる早智。静真、その手を握り返す。

○名画座・外

出てくる二人。新京極通りを歩いていく。

静真、早智の手を握る。静真を見る早智、その手を握り返す。二人、手を固くつないで新京極通りを歩いて行く。

静真「アラン・ドロン、やっぱり男前やなあ。

女優はなんて名前やったっけ。さっき

モ

ギリのオバちゃんに訊いてたやろ」

早智「ジョアンナ・シムカス。すごい美人だ

人だ

ったね」

静真「一生忘れへん映画になった?」

早智「——うん」

静真「ぼくもや——もう、十二時過ぎたわ。

なにか食べよか。食べたいもんある?」

早智「んー、そうだな——一生覚えてるやつ」

静真「そればかりやん」

早智「あかんのん」

静真「関西弁下手くそすぎて気持ち悪いわ」

早智「あー、『気持ち悪い』とか言

う!？」

二人、じゃれあうように歩いて行く。

○寺町通り・とんかつ屋へなぎさへ前
店前に立つ二人。

静真「とんかつとか、おかしかな」

早智「ううん。べつにいいけど。高倉君、

ここに来たことあるの?」

静真「何回も」

早智「そうなんだ。おいしいんだね」

静真「めっちゃくちゃ。このとんかつ
食べたら、よそのとんかつ食べられへ
ん」

早智「ほんとに! じゃあここにしよう!
」

店に入る二人。

○前同・店内

向かい合ってテーブル席に座って
いる静真と早智。

とんかつ定食が運ばれてきて、二
人の前に置かれる。

早智「白和えもついでる。ほんとにおい
しそう。いただきます」

食べ始める二人。

静真「どう?」

早智「……うん」

静真「『うん』って」

早智「ちよつと言葉が出ない」

静真「やろ」

早智「なんかね、カリってなってジュワ
ーッってなる」

静真「うん、カリってなってジュワッ
ってなるやろ」

笑う二人。

早智「お家の人といっしょにきてたんだ
ね」

首を横に振る静真。

静真「ぼく、施設育ちやから。中学出て
バラックで住み込みで働き始めてすぐ、
師匠が連れてきてくれてん。『食い物
扱う人生が始まるんやから、ほんまに
旨いもん知っておかなあかん』いう
て」

えつ、とした顔で静真を見る早智。

静真「父親はぼくが二つのときに死んで、
母親はその後すぐに他の男の人とどこ
か行ったそうや」

早智「——あの、あの、ごめんさい」

静真「ええねん、ええねん。こつちこそ
ごめん。なにを言うてんねや。食べよ。

なあ、一生忘れへんやろ、この味は」

早智「うん。この味は永遠に覚えてるよ
——大根のお味噌汁もすごいおいし
い」

静真「そやろ」

二人、とんかつ定食を旨そうに食
べていく。

○前同・店前

出てくる二人。

早智「あー、おいしかったー! ほんと
においしかったー!」

静真「やろお」

早智「もうどんなどんかつ食べてもおい
しいと思わないかもなあ——高倉君の
せいだ」

静真「ははは」

二人、手をつなぎ、歩いて行く。

○錦市場商店街

商店街の中を歩く二人。様々な店
に目を奪われ、歓声をあげる早智。

早智「すごいね! ほんとすごいね
ここ。わたしこういうところ大好
き!」

静真「変わってるなあ」

早智「そんなことないよお」

静真「そしたら、美子ちゃんや香奈ちや
んがここ来たらそんなに喜ぶか?」

早智「え——うーん、それはないかも」

静真「やろお」

早智「もう。わたしが楽しいんだから、
それでいいのっ!」

楽しい気に歩いて行く二人。

○錦湯の前

商店街を出、手を繋いで歩いて行
く二人。

銭湯、〈錦湯〉の前まで来る。男湯、女湯の暖簾が出ている。

早智「お風呂屋さんだ」

静真「うん、ここはほくも知らんかった」

早智「すつごい風情のある建物だよね」

静真「うん」

早智「ねえ、入ろっか」

静真「え、入るって……」

早智「だからここ。お風呂屋さん」

静真「いや、そやかてタオルもなにも持ってへんし」

早智「売ってるかもよ。ちよつと訊いてくる！」

女湯の暖簾をくぐり中に入る早智。

しばらくしてから暖簾から顔を出し。

早智「タオルもシャンプーもリンスも売ってるって！ ねえ、入ろっ！」

○前同・男湯・浴場

椅子に座り、体を洗っている静真。

早智（声）「高倉くーん」

静真「なんやー」

早智（声）「貸し切りだよー」

静真「こつちもやー」

早智（声）「高倉くーん」

静真「なんやー」

早智（声）「わたし、楽しいー！」

静真「ほくもやー」

早智（声）「あはははっ」

響く早智の笑い声を笑って聞いている静真。

○前同・前の路上

風呂から上がり、早智を待っている静真。

暖簾を開け出てくる早智。

早智「お待たせ」

湯上りの早智に見惚れる静真。

早智「ん？」

静真「いや——」

静真、早智の手を取る。腕を絡める。一瞬驚く早智だが、身を寄せる。二人、歩きます。

早智「高倉くん」

静真「なに」

早智「ここまで、だからね」

静真「え」

早智、少し笑んで、まっすぐ前を見ている。

静真「——分かってるよ、そんな。なに言うてんねんな」

早智「ありがとう。高倉君、優しいね。すごい優しいね。やっぱり高倉君、思

ってたとおりの人だった——ねえ。少しゆっくり話しがしたい」

静真「うん」

腕を組み歩いていく二人。

○鴨川の河川敷

河川敷に座っている静真と早智。

早智「今日は本当にありがとう」

静真「いや、こつちこそ」

早智「急に電話かかってきてびっくりしたよね」

静真「え、そりやまあ。芸能人から電話かかってくるなんて思ってたなかったし」

早智「芸能人かあ。まだまだヒョっ子だけど。パチンコ屋さんとかレコード屋さんの前とかで歌ってるレベルだし。こうやって道歩いてても誰も気づかないし。でもね、高倉君。わたしたち、絶対売れるの。売れなきゃならないの」

早智、鴨川の流れを見つめながら。早智「わたしの家、すごく貧乏なの。オンボロのアパートに家族三人住んでてさ。お父さん病気で体壊して内職しかできなくて。だからお母さんの工場仕事の収入でなんとかやりくりしてて。そんなだから、わたしも中学出たら働くんだらうなって思ってた。でも中学の音楽の先生がね、『おまえには歌の才能がある。絶対音感も持ってる。生かさなきゃもったいない』って言ってきてさ。放課後、個人的に歌のレッスンしてくれたんだ。でき、わたしダメモトで今の事務所の養成所の試験受

けてみたの」

静真「そうなんや」

早智「そのときいっしょに受かったのが美子と香奈。三十人くらい受かったんだけどね、この三年間でほとんどの子がやめた。わたしたち特待生だったんだよ、すごいでしょ。」

静真「特待生」

早智「うん。試験の成績トップスリーの特待生。レッスン料や通所の交通費全額免除。そうじゃなきゃ三人とも養成所に通えてない」

静真「三人とも？」

早智「うん。美子と香奈もわたしといっしょで、お金持ってる家の子じゃないんだ。美子はお母さんしかいなくなつた家の六人きょうだいの長女。香奈の家なんか、お父さんが賭け事ばかりやって毎晩借金取りが来てたつて言つた。だから、わたしたち、絶対に売れなきゃならないの。負けるわけにはいかないの」

静真「特待生やもんな」

早智「うん。でもさ、朝から晩までレッスン漬けだったわたしたちが、高校行きながら通つてた子たちに負けるわけじゃなかったんだよね。だからこれからも絶対勝つんだよ、わたしたち」

静真「ご両親、芸能界に入るのに反対せえへんかったの？」

早智「最初はびっくりしたみたいだけど、お父さんが『やらずに悔い残すくらいならやってみろ』つて。お母さんも『ダメだったら戻つてきて三人で貧乏したらいい』つて言つてくれてさ」

静真「へえ」

早智「高倉君はどうして今のお店に？」

静真「ぼく？ ぼくは施設の職員さんが師匠の知り合いで。いつまでも施設にいるのもなんか嫌やつたし。早くなにか手に職つけたかったし。店の二階に住まわせてくれるつていうから、それで」

早智「師匠つて、おじいさん？」

静真「ううん、まだ三十ちよつと」

早智「へえ、若いんだね。師匠とか言うから、なんかヨボヨボのお年寄り想像しちゃつた」

笑う二人。

静真「『見て覚えるなんていうのはもう古い。俺が一から丁寧に教えたる』いうて仕込んでもろうた。若いけど最高の師匠や」

早智「じゃあ、いつか師匠超えなきゃね」

静真「いやあ、それは無理やなあ。何年かかっても師匠の焼く串は超えられんやろうなあ」

早智「無理なんて言つちやだめだよ。目指して頑張らなきゃ」

早智を見る静真。微笑んでいる早智。

静真「吉沢さん、やっぱりなんかすごいなあ」

早智「高倉君」

静真「なに」

早智「わたし小五のとき脳腫瘍の手術してるの」

静真「脳腫瘍——」

早智「うん。けっこうな大手術でさ。大医院でね、脳外科のすごい偉いお医者さんが執刀したんだ」

静真「うん」

早智「でも、わたしの家、そんなのじゃない。だからお母さん、仕事増やしてさ、新聞配達とかもやつて、夜はスナックでも働いてたの」

静真「——」

早智「お父さんも内職の仕事増やしてさ。二人とも本当に寝る間もないくらい働いた。お母さんもお父さんも言わないけど、わたし、知ってるんだ、二人が親戚中まわつて頭下げってお金借りたの。ぜんぶわたしのためよ——だから、だからね高倉君。わたし二人に恩返しするの。絶対いい暮らしさせてあげるの——両親のこととか言つて、ごめんね」

首を横に振る静真。

早智「デビューが決まった日に三人で誓

ったんだ。青春の全てを賭けよう、捧げよう、そして絶対成功しようって。クサイ？ 笑う？」

静真「笑わへんよ。笑うわけないやん」

早智「ありがとう。あのね、わたしたち五年後の解散を決めてるんだ」

静真「え」

早智「ねえ、高倉君。マラソンランナーはなんで走れるんだと思う？」

静真「なんでって、そりゃ完走してゴールするためやろ」

早智「でしょ。ゴールがあるから走れる。

わたしたちだってそうよ。ゴールに向かって走り出したの。五年後って決めたの。ひたすら走って、売れて、成功して、五年後エンジェルスは横浜スタジアムで燃え尽きるの」

静真「横浜スタジアム？」

早智「三人とも神奈川出身なの。わたしは川崎、ミコは横須賀、カナは厚木。

だから」

静真「へえ」

早智「横浜以外の神奈川県民にとって、横浜ってちよつと特別な街なんだ。憧れと嫉妬が混じってるみたいなき。だから、最後に横浜スタジアム制圧してやるんだ」

静真「かっこええやん」

早智「かっこええやろお」

笑う二人。

早智「わたし、エンジェルスの子として生きるの、これから」

静真「——うん」

早智「だからわたしね、その前に吉沢早智の最高の思い出を作りたかった。だから、高倉君に電話したんだ——この指さ」

右手小指を立てる早智

静真「うん」

早智「学校行く前お母さんがファンデ塗

つて、悲隠してくれてたんだ。たまに

「こん

な指に生んじやってごめんね」なんて

言

ったりして。わたしはそんなに気にしな

なかつたんだけど。でもまあ気にして

な

くもなかった」

静真「うん。分かるわ、その気持ち」

早智「でも、でもね。高倉君に出会えて、

こ

の指でよかつたって、そう思えたの。

なん

か、同じ指の、高倉君となら、最高の

思い

出作れるって思ったから——今まで生

き

てきて、いちばん楽しい日になった

よ」

早智、静真の頬に口づける。

早智「ほんとのほんとに、ここまで」

静真「うん」

○阪急百貨店・エスカレーター

並んで昇っていく静真と早智。

○前同・化粧品店

陳列された化粧品を見て歩いてい

る早智。その後ろに静真。

静真「美子ちゃんと香奈ちゃんに口紅買

うてんやろ、もうええやん」

早智「うるっさいなあ。わたしのものま

だなにも買ってないのっ」

静真「化粧品なんか東京でもなんぼでも

買えるやろ」

早智「今日ここで買うことに意味があるのっ！ もう、高倉君女心を全然わか

ってない！」

苦笑いをする静真。

香水のコーナーで立ち止まる早智。

早智「あ」

静真「ん？」

早智「ヘアラン・ドロン」だった」

静真「ほんまや。そんな香水あるんや」

陳列された香水「ヘアラン・ドロン」を見る二人。

静真「プレゼント、するわ」

早智「え」

静真「こっちのやつたら、買える」

静真「ヘアラン・ドロン」のミニポトルを手にして早智に見せる。

静真「臨時収入あったんや。貰ってくれる？」

早智「うん、ありがとう」

静真を見て微笑む早智。

○地下鉄・阪急四条河原町駅構内

梅田行きの特急電車が止まっている。静真と早智、向かい合って立ち見つめあっている。

早智「じゃあ」

静真「うん」

早智、後ろを向く。涙を拭う。前を向く。満面の笑みを浮かべ静真を見る。

早智「今日のことぜんぶ、忘れない」

静真「うん、ほくも」

早智「あのさ、高倉君」

静真「なに」

早智「五年後、また会いたい」

静真「五年後」

早智「うん、五年後。エンジンエルのサチじゃなくなったら——そのとき、また電話する」

静真「うん」

早智「会つてくれる？」

静真「会うよ。絶対会う」

早智「ほんとに？ 覚えててくれる？」

静真「ほんまや。絶対や」

強くうなずく早智。小指を立てた右手を差し出す。

静真「え？」

早智「赤い指どうしで、げんまん——あ、

ク

ロスできないけど」

静真も左手を出し、小指を立てる。

二人小指を合わせて。

早智「じゃあ」

静真「うん」

静真・早智「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます。指切った！」

笑う二人。発車のベルが鳴る。

特急電車に乗り込む早智。

静真「ずっと応援する。エンジンエルのサチを。これからずっと応援する」

微笑み、うなずく早智。

静真「また、リクエスト書く。給料ためて、レコードプレーヤー買って、レコードも買う」

うなずく早智。

静真「五年後、待ってる。ほんまに待ってる」

うなずく早智。

ドアが閉まる。発車。

窓越し、車両の中から小さく手を振る早智。

頭の上で大きく両手を振り続ける

静真。

遠ざかる梅田行き特急電車。やがて見えなくなつて。

静真、ずっとそのまま立っている。

○へあかつきハイツン外階段

おかもちを持って外階段を上がつていく静真。

○前同・二〇三号室前

部屋の外に置かれた皿を、おかもちの中にかたしていく静真。

戸が開く。若い男が飛び出すように出てくる。驚く静真。

翠「出ていけっ！ このボケっ！」

男「言われんでも出ていったらあ！」

翠「これで終わりや！ 二度と来るな！

あの女触った手でうちの体触つてみい！ 殺したるからな！」

男「言われんでも分かつてるわあ！ 二度とおまえのどこなんか来るか、ボケ！」

階段を駆け下りていく男。

憤怒の表情で立っている翠。呆然

としている静真に気づく。

翠「ああ、静真ちゃん」

小さく会釈する静真。

翠「タイミング悪いなああんた。えらいとこ見られてしもた」

静真、立ち去ろうとする。

翠「待って、静真ちゃん」

静真「はい？」

翠「部屋、入って」

静真「え」

翠「ええやん」

静真「いや、仕事があるんで」

翠「五分だけ、ちょっとだけ。な、お願い」

翠をじつと見る静真。

○前同・二〇三号室内

修羅場の後、散らかっている室内。

翠「えらいことなってもうた、ははは」

翠、部屋をかたづけかけるが、うずくまってしまう。そのまま鳴咽する。

静真「あの——」

翠「ごめん、ごめんな静真ちゃん。仕事あるのにな」

静真「いえ」

翠「なあ、ちょっとこっち来て静真ちゃん」

静真「え」

翠「こっち来てって言ってるん」

静真「あの——」

翠「来てえや、早お！」

翠の側に立つ静真。

翠「ごめんな大きな声だして。ほんまにアホやなうち」

静真の手を取り、その手を自分の肩に回させる翠。驚く静真。

翠「寒いんや。ほんまに寒いわ。うちな、男と別れたらいつつも寒なんねんよ。五分だけ、五分だけや。こないしてて。お願いや、ひとりにしやんといて。五分だけこないしてて」

静真「——はい」

翠「こんなんばっかりや、なんでやろ。うち、いつつもこんなんや——」

鳴咽する翠の肩を抱きしめる静真。

○ヘバラック〈店内〉(夜)

営業中。焼き台の前に立っている

静真。

カウンターで飲んでいる翠。

翠「風邪なんか嘘や」

静真「え？」

翠「静真ちゃんに店任せられるようになったから、大将、嫁さんと家で乳くり合うてんねや」

静真「そんなことないです。ほんまに昨日しんどそうやったから」

焼き台に手羽先を並べていく静真。

○前同・静真の部屋(夜)

床にレコードプレーヤーが置かれている。壁にはエンジェルスของポスターと早智のポスターが貼られている。

静真、壁に立てかけていたエンジェルスのEPレコード〈ヘラックイガールにご用心!〉をプレーヤーの上に置く。流れて来る三人の歌声。静真、リズムを取りながら聴き続ける。

○テレビ放送画面 ①ベストテン番組

司会者(男)「今週の第八位。先週の十位から一気にランクイン! 初登場、エンジェルズ『天使の羽音』!」

司会者(女)「エンジェルズの皆さん、どうぞ!」

元氣よく登場する三人。画面向かって右から香奈、美子、早智の順で並び立つ。

司会者(男)「初めまして」

三人「初めましてっ!」

司会者(女)「うわー、元氣がいいわねえ。じゃあテレビの向こうの皆さんにそれぞれ自己紹介しましょうか」

美子「はい! 市川美子です。よろしくお願ひします! 初登場八位、本当にうれいしです! ありがとうございます!」

香奈「杉原香奈です! よろしくお願ひします! 今日、この場に立てて、本当に夢みたいです!」

早智「吉沢早智です。よろしくお願ひします! 精一杯歌い続けるので、これからエンジェルズを応援してください!」

美子「三人そろって——」

三人「エンジェルズです！」

司会者（男）「では早速歌っていただき

ましょう！ 今週第八位、初登場エン

ジェルズで『天使の羽音』！」

イントロが鳴り、セットへ駆け出

す三人。

○（バラック）店内（夜）

カウンター席で砂肝とセセリをア
テに呑んでいる翠。焼き台の前に
立っている静真。店のテレビが
『天使の羽音』を歌うエンジェル
ズを映し出している。翠、テレビ
を見上げ。

翠「どの子？」

静真「え？」

翠「静真ちゃんがデートしたん」

静真「——師匠、最近しゃべりでかなわ
ん」

翠「なあ。風邪治ったとたんに天橋立に
二泊とかなんやねん。いっぺんに嫁さ
ん孝行になってしもてからに。チー大
将の静真ちゃんに甘えすぎや」

静真「ぼくなんか、ほんまにまだまだで
す」

翠「なあ、どの子？」

静真「——左の子です」

翠「名前は？」

静真「サチです。吉沢早智」

翠「へーえ、かわいらしい子やん」

テレビに映る早智を見る静真と翠。

× × ×

精算を済ませ、店を出ようと戸を

開ける翠。

翠「いやあ、いやらし。雨降ってるや

ん」

静真、翠の横に立ち。

静真「気いつかへんかった。あの、奥に
傘あるんで取ってきます」

行きかける静真の手を取る翠。驚

いて翠を見る静真。

翠「知ってる？ こんなん遣らずの雨っ

て云うんよ、静真ちゃん」

微笑んでいる翠。その手を自身の

胸に当てがう。驚く静真。

翠「エンジェルズのサチは、おっぱい触
らせてくれたりせえへんかったやろ」

静真「……」

翠「うちなあ、あの日から夜が来ると寒
なんねん。寒いままやねん」

静真「翠さん」

翠「女の気持ちムダにする男はカスやっ
て、言うたことあるやろ、静真ちゃ
ん」

○テレビ放送画面② ホール公開の歌番
組

バンドをバックに元気いっばいに
歌っているエンジェルズ。その映
像に静真と翠の声が重なる。

翠（声）「ありやりや」

静真（声）「——ごめんさい」

翠（声）「気にせんでええんよ。最初は
誰かてそんなもんや。なあ、拭いて—
—。ちよつと、なに凹んでんのよ。ほ
んまにかわいいなあ、あんだ。あ、ち
よつと心臓バクバク云うの小さなって
きた。今度は上手いこといくから、安
心しいな」

○テレビ放送画面③ スタジオ生放送の

音楽番組

男女の司会者の横に立っているエ
ンジェルズ。それぞれの手に○と
×の札を持っている。

司会者（女）「とということて人気沸騰中
のエンジェルズの三人に視聴者の皆さ
んからたくさん質問が届いていますの
で、歌の前にかくつか答えてもらいま
しょう」

司会者（男）「いいですか、正直に答え
てよ。正直にね」

美子「あー、なんかドキドキする」

司会者（女）「よし、これからいっち
やおう。男の子とデートしたことがあ
る。マルかバツかー？」

全員サツとバツを上げるエンジェ
ルス。

司会者（男）「えー、本当かなあ」

三人「本当です！」

司会者(男)「ムキになるところが怪しいなあ」

香奈「本当ですよ。わたしたちレッスンばかりでそんな余裕なかったですもん」

美子「そりゃ憧れはありますけど」

司会者(女)「サチちゃんは何？」

早智「そうですね。いつか、素敵な人と素敵なデートをしてみたいって思いますが。でも今は、ファンの皆さんが恋人です。ねー」

美子・香奈「それでーす」

司会者(男)「あーっと、残念ながらここで時間！ 三人への他の質問は次回登場したときになってことで。それでは歌ってもらいましょう。エンジェルズでチャート初登場三位『ラブハートはクレツシエンド』！」

イントロが鳴り、セットへ駆け出す三人。

○へあかつきハイツ(二〇三号室(夜))

部屋にいるのは静真。テレビの前に座り『ラブハートはクレツシエンド』を歌うエンジェルズを見ている。アップになる笑顔の早智を見ている。

× × ×
夜更け。炊事場、ガスコンロの上にフライパンを乗せ、手羽先を焼いている静真。

翠「たら〜いま〜」

「したたか酔った翠が帰って来る。後ろから静真に抱き着く。」

静真「おかえり」

翠「焼き上がり〜。グッドタイミングや〜ん」

静真「だいたい、帰ってくる時間分かってきたから。けど、ほんまに手羽先好きやんね」
翠「そりゃあ。うちはほんまに手羽先好きや。静真ちゃんとおんなじくらい好きや」

翠、静真を向き直らせ顔を手挟み

キスをする。一瞬驚く静真だが、すぐに応える。

唇を絡めあう濃厚な二人のキス。

× × ×
布団の上でセックスをしている二人。仰向けになった静真に跨り、翠が激しく腰を振っている。

翠「元氣いっぱいや。中でビクビクしてるわ、静真ちゃんのみん」

喘ぐ翠。激しく腰を突きあげる静真。

翠「ああんっ！」

のけ反る翠。二人同時に果てる。

× × ×
布団の上に横になっっている二人。

翠に腕枕してやっっている静真。

翠「お師匠さんになんか言われたやろ」

静真「え」

翠「うちのこと」

静真「——べつになんも」

翠、静真の頬をつねる。

静真「いつっ」

翠「隠さんでもええ。うちが言われてんから、この前」

静真「あの、なんて」

翠「先のある身や、弄ぶんやったらやめたってくれ、言うてなあ。静真ちゃんは何んて言われたん？」

静真「……」

翠「正直に言うてみ」

静真「——深入りするな、言うて。水商売の女に手を出すのは早すぎる、言うて」

翠「ははっ。自分かて水商売のくせして。職業差別や、なあ」

じつと天井を見上げている静真。

翠、静真の左手を取り見る。

翠「きれいな朱い指——お師匠さんの言うことやから、聞かなあかんなあ」

小指を口に含む翠。されるがままになりながら、首を横に振る静真。

翠「深入りしたらあかんよなあ」

小指を嘗め続ける翠。首を横にふる静真。

翠「そりゃ。弄んでんねや、うちはあん

たのことを」

静真「——それでも、かまへん」

ふいに静真の上に覆いかぶさる翠。

翠「なあ、四年後どないするん？」

静真「え？」

翠「エンジェルスのサチちゃんとかうんか？」

静真「——そんなん、もう忘れてしもてるわ」

翠「いっぺんに人気出たもんなあ。けど分からんでえ。なんちゆうても初めてのデートでした約束や。女はそういうのちやんと覚えてるもんなんやから」

静真「芸能人の気まぐれや、あんなん」

翠「ほんまは会いたいんやろお。電話あったら会いに行くんやろお。怒らへんから言うてみ」

静真「……行かへんよ、そんなん」

横を向く静真。その顔を手挟み、

前を向かせる翠。

翠「ほんまに行かへん？」

静真「行かへん」

うなずく翠。

翠「忘れさせてしもうたる、エンジェルスのサチのことなんか」

静真を抱きしめる翠。強く抱きしめ返す静真。

○琵琶湖・近江舞子水泳場

砂浜を手を繋いで歩く水着姿の静真と翠。

○同・浅瀬

翠の手を曳いている静真。翠、バタ足で湖面をパチャパチャしながら。

翠「琵琶湖はベタベタせんのがええなあ」

静真「うん」

翠「波も小さいし」

静真「うん」

砂浜のスピーカーからエンジェルスの曲が流れてくる。

翠「エンジェルスや」

静真、無言。

翠「エンジェルスやで〜」

静真「——うるさい」

翠「なんて曲？」

静真「知らん」

翠「嘘ばかり。なんて曲？」

静真「知らんて」

翠「静真くん、なんて曲ですか〜」

静真「……『渚のサンシャイン・ボーイ』」

翠「知ってるやんっ！」

手を離し、静真に抱きつく翠。

静真「うわっ！」

そのまま強引にキスをする翠。湖に沈む二人。

○嵐山・渡月橋

肩を並べて橋を渡っている静真と翠。翠、紅葉している山を見やうて。

翠「きれいやなあ、ほんま」

静真「うん、きれいや」

翠「知ってる？ 渡月橋渡ったカップルは別れるんやで」

静真「——嘘や、そんなん」

翠「ははっ、嘘か」

静真「嘘に決まってる」

翠「最初のデートもここやった」

静真「え」

翠「十六のとき。中学出て最初に働いた靴下工場の工員さん。うちの初めての人や。どうしてるんやろ。結婚して、子供とかいてるんやろなあ」

静真「——」

翠「それから、えーっと何人や。八人か。静真ちゃんが九人目やな」

翠の手を取る静真。

翠「ピンサロで働いてたこともあるんやで。」

五人目のときか。他に女出来て出て行ってたけどな。ヒモに愛想つかされてたら、

う

ちもどうにもならんなあ、って死にたな

ったわ、あのときは。ははは「

繋いだ手を強く握る静真。
渡月橋を手を繋いで渡っていく二人。

○へあかつきハイツ〜二〇三号室(夜)

大晦日。十四インチのテレビに映し出されている紅白歌合戦をこたつに入つて見ている翠。炊事場で調理していた静真が、年越しそばの丼が二つ乗った盆をこたつの上に置く。翠と差し向いにこたつに入る。丼を手取る翠。静真も。

翠「いただきます」

静真「いただきます」

そばをすすり始める二人。

翠「やっぱり鶏で出汁とつたらおいしいな」

静真「うん。皮を一回炙るんがコツや」

翠「もう立派な料理人やな、静真ちゃんも」

静真「まだまだや——けど」

翠「けど?」

静真「いつか独り立ちしたい。そんで」

翠「そんで?」

静真「翠と結婚したい」

そばをすすする静真。

翠「なあ、ポスターどないしたん?」

静真「え?」

翠「部屋に貼ってあったエンジェルスと

サチちゃんのポスター」

静真「……はがした」

翠「捨てたん?」

静真「……」

翠「なあ、捨てたん?」

静真「——押し入れに入れたある」

翠「それ、うちが捨てろつて言うたらど

ないする?」

静真「——捨てるよ」

翠「また嘘つく」

静真「また嘘ちゃう。捨てる」

翠「ははっ。言わへん、そんなん」

静真「え」

翠「うち、そんな意地悪な女とちゃう

で」

静真「——なんやねんな、ほんま」

翠「ふふっ」

そばをすすする二人。

翠「あ、エンジェルスや」

テレビに目をやる二人。きらびやかな衣装を身にまとい『ラブハートはクレッシェンド』を歌い始めるエンジェルス。

翠「たいしたもんやなあ。デビュー二年目で紅白や」

テレビ画面、アップになる早智を見つめる静真。

翠「♪そうよ恋のココロはクレッシェンド 日ごと強くなるわ あなたへの思い」

エンジェルスの歌声に合わせて口ずさむ翠。テレビから目を離しそばをすすする静真。

○へあかつきハイツ〜外階段(夜)

階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前(夜)

ドアに《静真へ。友達と一泊旅行に行つてきます》の張り紙。

しばらく見てからはがす静真。折り畳み、ポケットへ入れる。階段を降りていく静真。

六角通りを歩く静真の姿に、のちの翠との会話が重なる。

静真(声)「翠」

翠(声)「なに」

静真(声)「友達つて誰や」

翠(声)「ん? 隣のスナックのアサミ

ちゃんや。息抜きしよういうて有馬温泉行つてきた。気持ちよかったわ」

静真(声)「そんなこと言うてへんかったやないか」

翠(声)「急に決めたんやもん。なに、

いちいちあんたに断らな、うちは友達

と息抜きもできひんの。あほくさ」

静真(声)「翠」

翠(声)「そやからなに! あんた最

近妙にしつこいで」

静真(声)「——先月から始まったあれ、

絶対やらなあかんのか」

翠（声）「あれって？」

静真（声）「そやから、客と、喫茶店とか他の店寄つてから店にいくやつ」

翠（声）「ああ、同伴。そや、もつと早うやってたらよかつたって、ママ言うてるわ。実際うちのギャラも全然前と違うし。チップまでくれるお客さんいてるしな——なに、気に入らんのん」

静真（声）「気に入るわけないやろ、そなんもん」

翠（声）「——あんた、やっぱり水商売の女とつきあうの、早すぎたんかもな」

ぶすつとした顔で六角通りを歩いていく静真。

○スナック〈ダイアナ〉入口（夜）

○前同・店内（夜）

ビールを飲んでいる静真。カウンターを挟んで立っている翠。

翠「お店には来てほしくないって、言うてへんかった？」

静真「俺の勝手やろ、そんなん」扉を開けて入ってくる背広姿の客

四人。

翠「あつ、城所さん。いらつしやい」

城所「言うてたとおりのつれもて行こう、や。マリエちゃん」

翠「いやあ、嬉しわあ」

ボックス席に座る四人におしほりを持って行こうとする翠。すれ違いざま静真に。

翠「本名で呼んだりしなや」

ボックス席で愛想よく四人に接客する翠を見る静真。

○〈バラック〉店内（夜）

営業中。焼き台の前で鶏を焼いている静真。浄雲と談笑している次郎。

○〈あかつきハイツ〉外階段（夜）

階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前（夜）

ドアに《静真へ。アサミちゃんと有馬温泉に行つてきます》の張り紙。
はがす静真。クシヤクシヤに丸め、叩きつける。

○〈バラック〉店内

開店前。仕込みをしている静真。奥から現れた次郎が、静真の打つた串を手取る。

次郎「話にならん」

静真「え」

次郎「全部捨てえ。こないな串焼いて客から金もらうわけにいかん」

静真「師匠……」

次郎「今日はもう上で寝とけ」

串を打ち始める次郎。棒立ちの静真。

次郎「聞こえたやろ。二回言わすな」

静真「すみません」

厨房を出る静真。二階へと階段を上がっていく。

× × ×

次郎が串を焼いている営業中の店内。カウンター席に浄雲が座っている。静真が降りてくる。

浄雲「お、静真ちゃん、今日はどないしたんや」

静真「はあ——あの、師匠」

次郎「どこへなと行け」

静真「すみません」

店を出る静真。

浄雲「どないしたんや、静真ちゃん」

次郎「アホが。そやから言うたんじゃ」ため息をつく次郎。

○路上（夜）

六角通りの踏切を超える静真。

○〈あかつきハイツ〉二〇三号室前（夜）

ドアにもたれて立っている静真。外階段から翠が上がってくる。静

真を見て立ち止まる翠。また歩き出し部屋の前までやってくる。鍵をノブに差し込み回す。ドアを開ける。

翠、静真を見て。

翠「入りにいな」

室内をコナす翠。

○前同・二〇三号室・室内（夜）

服を脱ぎ始める翠。その様子をじつと見ている静真。

翠「またアサミちゃんと温泉入って息抜きしたなってなあ——って言うたらあんた信じるか？」

静真「翠——」

翠「そうや。男とや。あんたが前に店来たときに後から来た城所さんや。同伴しただけでチツプぎようさんくれるお客や。彼、和歌山のごつつい資産家の三男坊でなあ。北山でブティック三つも経営してるねん。すごいやろ。実家には寄らんかったけど、市内の旅館に泊まって観光してきた。ええところやったで和歌山。まだなんか訊くことあるか」

静真「翠、おまえ——」

翠「気安う名前呼ばんとってえや！なにが『おまえ』や！ええわ、教えたはセックスしたわ城所さんと。最初はほんまに有馬温泉や。そのとき初めてしたわ。あんたと違うてコンドームなしや。羨ましいやろ。プロポーズされてんよ、うち。今度親に紹介するって言うてくれてんよ城所さん。これで満足か？」

静真「プロポーズって」

翠「受けたで、もちろん。なあ、あんたもしかして本気でうちと結婚できるやなんて思ってたん？アホちゃう。なんでうちがボロの焼鳥屋の小僧さんと結婚せなあかんのん。言うたやろ、弄んでただけやあって。あんたもそれでええって言うてたやん。それともなに、あんたうちのこと幸せにできる自信あるん？」

静真「……」

翠「あるん！」

静真「翠」

翠「年上の女とええ思いできたんや。ありがたいて思ってたほしいわ——な、きれいに終わりにしよ。もう店にも行かんし、出前頼むこともない。あんたももうここには来んといて。店にも絶対来んといて。道で会うても声かけんといて」

呆然と翠を見ている静真。

○前同・通路（夜）

力なく歩く静真。階段を降りようとしたところで二〇三号室のドアが開いて、翠が顔を出す。

翠「なあ、ほんまに来んといてや！しつこうつきまったりしたら警察呼ぶからな！ほんまやで！」

ドアを激しく閉める翠。

力なく階段を降りていく静真。

○前同・二〇三号室（夜）

部屋に戻り壁に背中を預ける翠。そのままずると床に尻をつける。

翠「あつ、あつ、あつ……ごめん……静真ちゃん、ごめん……」

泣き出す翠。

翠「……ごめん、静真ちゃん、大好きや。いちばん好きや。好きや、好きや、あんたのこと……ごめんうう……けど、うちかて、うちかてな……許して、許して静真ちゃん……寒い、寒いわ静真ちゃん……抱きしめてえや、なあ、なあ、なあ……」

我が身を抱きしめ、嗚咽する翠。

○（ハバラック）店内（夜）

暖簾をしまっている次郎。そこに戻ってくる静真。軽く会釈をして階段を上ろうとする静真。

次郎「静真」

静真「はい」

次郎「明日、今日といっしょの串打った

ら、焼きは二度と任せん。ええな」
静真「——はい」

階段を上っていく静真。

○前同・二階。静真の部屋(夜)

布団に入っている静真。何度も寝返りをうつ。眠れない。不意に左手の小指がピクピクと震える。それを見る静真。

手を伸ばし枕元に置いたラジオのスイッチを入れる。

DJ(声)「へはい、というわけで、本日のゲストは今をときめくエンジェルスのお三方です。こんばんはー」

驚く静真。ラジオを見る。

三人(声)「へこんばんはー」

美子(声)「へミコですー」

香奈(声)「へカナですー」

早智(声)「へサチですー」

美子(声)「へ三人そろって」

三人(声)「へエンジェルスですー」

DJ(声)「へ相変わらず元気がいいねえ。こつちまで元気になっちゃうよ」

美子(声)「へ元気がいいのだけが取り柄の三人ですー」

香奈(声)「へたたのバカじゃん、それじゃ」

三人の笑い声が響く。

DJ(声)「へカナちゃんが『ドリム・スクール』に続いてセンターで歌ってるんだよね新曲『なみだ色ソナテイーネ』も」

香奈「へはい。リードボーカルがんばってますー」

DJ(声)「へで、なんとなんとこの曲はサチちゃんが作詞に参加してるんだよね」

早智(声)「へはい。作詞家の中川先生といっしょに作らせていただきました」

DJ(声)「へすごいなあ、作詞家デビューだ。けどこの曲、前の曲とずいぶん雰囲気違って、切ないというか哀愁を帯びてるというか、すごく大人っぽ

い感じだよ、カナちゃん」

香奈(声)「へはい。ちょっと背伸びして歌ってます。でもこんな歌詞書いちゃう、いつもセンチメンタル真つ最中なサチに影響受けてるから哀愁の方は大丈夫です」

早智(声)「へもう、ちょっと、やめてー」

DJ(声)「へえ、なにそれ、どういうこと？」

美子(声)「へサチはねー、サチはねー。アラン・ドロン様にとっても会いたいの。でも会えないの。だから悲しい悲しい乙女なんですよお」

早智(声)「へだからもうやめてってばあ」

DJ(声)「へサチちゃんはアラン・ドロンが好きなんだ。また渋いねえ。会いたいくらい好きなのか。でもさ、全国の子はそれ聞いてショック受けてるんじゃない？」

早智(声)「わたしのファンは、わたしの気持ちを大事にしてくれる人ばかりだから大丈夫です」

香奈(声)「なんか上手いこと言ってるー」

早智(声)「うるさい、カナ」

DJ(声)「そうか。じゃあさ、サチちゃん、アラン・ドロンに告白しちゃおうここで」

早智(声)「へは？ え？」

DJ(声)「へフランスまで聞こえてるかもよ、この放送」

美子(声)「へ聞こえてない」

DJ(声)「へいや、分らないよ。恋する乙女の気持ちは海をも超える！はい、じゃあサチちゃん、アラン・ドロンに今の素直な気持ちを、三、二、

一、キューッ！」

早智(声)「へ——アラン・ドロンさん。ずっとずっと大好きなままです。いつかきつと会いたいです——ちょっともう、なにこれ」

美子(声)「へビュービュー。まいっち

やうなあ〜」

香奈（声）「へアラン・ドロン様に恋する乙女サチ!」

早智（声）「へ怒るよ、ほんともう!」

DJ（声）「へははは。ケンカしないの。

じゃあサチちゃんの熱い愛の告白の余韻が残るままエンジェルスで——はい、

三人でタイトルどうぞ!」

三人（声）「へ『なみだ色ソナティーネ』!」

イントロが流れだし、エンジェルスの歌声がラジオから響く。じつと天井を見ている静真。

エンジェルス（歌）「へねえ 今どこに

いてなにをしてるのあなた!」

静真、起き上がる。押し入れの戸を開ける。丸めて立てていたポスターの輪ゴムを外し、その天地を持ち、広げる。

バストショットの早智がにっこりと微笑んでいる。曲が早智のソロパートになる。

早智（歌）「へこんな逢いたいのにいつも独りぼっち 冷たい雨に夜ごとうたれてるのよ わたし!」

静真、泣く。涙がポスターの早智の顔にこぼれ落ちていく。

○次郎の家・居間（夜）

差し向ってこたつに入り、すきやきをつつきながら紅白歌合戦を観ている静真と次郎。

次郎「去年の紅白はどこで観たんや。おまえうちに誘っても断ったやろ」

静真「え? はあ……」

次郎「翠ちゃんとか」

静真「——はい」

次郎「先月結婚したんやて。店もやめたそう

や」

静真「そうですか」

次郎「苦勞してきた子やからな。上がり
がブティックの奥様で万々歳や」

静真「ええ、そうですね」

瓶ビールを差し出す次郎。軽く頭を下げ受ける静真。

次郎「恨んでへんのか」

静真「そんなのは、はい」

次郎「男にしてもろうたし、酒も覚えさせてもろうた。おかげでこないして差し向かいで飲める」

グラスのビールを呷る静真。

次郎「ほら、肉食え静真。近江牛やぞ、

どんどん行け」

静真「はい、いただいています」

次郎「おつ、出てきた出てきた。エンジェルスや」

テレビに目をやる二人。画面の中、エンジェルスが『なみだ色ソナティーネ』を歌っている。

次郎「レコード買うたりしてるんか?」

静真「——はい、一応」

次郎「そら買わななあ。なんせ天下のエンジェルスのサチとデートしたことある男やもんなあ、おまえは」

静真「それ、もうええですよ」

次郎「なんでや、ほんまなんやからかまわんやないか。コンサートとかには行ったことあるんか?」

静真「いえ」

次郎「なんでやあ、行ったらんかい、行ったらんかい。来年は行け。仕事休んでもかまへん、行け」

静真「そんなん、ええですよ」

台所から次郎の妻、琴絵（33）がそばの井が二つ乗った盆を持って来る。

琴絵「ちよつとあんた、はや絡み酒?

静真ちゃん困ってるやないの。ごめんねえ、この人静真ちゃんとお酒飲めるのが嬉しいてしかたないんよ」

次郎「なんやおまえ、もうそば持って来たんか。まだわしらすき焼き食べてるやないか」

琴絵「いっしょに食べたらええやないの」

次郎「せわしないなあ。静真、そばも食え、そばも。肉乗せて食え」
静真「はい」

そばをすすり始める二人。

琴絵「静真ちゃんほほんまにええ子やねえ」

次郎「もてるなあ静真。もてもてや。さすが女殺しの静真やな」

静真「——やめてください」

次郎「はははっ。照れとる。旨いか静真」

静真「はい。旨いです」

そばを食べる静真を微笑んで見ている次郎と琴絵。

○青空

夏。太陽がキラついている。

○へバラックへ入口

打ち水をしている静真。空を見上げ汗を拭く。打ち水を終え、店に入る。

○前同・店内

カウンターの椅子に座り、アイスキャンデーを食べながらスポーツ新聞を読んでいる次郎。

次郎「しかしビックリしたなあ」

静真「はい？」

次郎「エンジェルスや、エンジェルス。解散発表って、なにがあったんや」

スポーツ紙の裏一面を静真に見せる次郎。へエンジェルス来年三月

で解散！の文字が大きく載っている。

静真「ああ」

厨房に入り、仕込みを始める静真。

次郎「なんや。薄い反応やな、おまえ」

静真「そら、いつかは解散しますよ」

次郎「いや、そうやけどやな。テレビ点けたら見やへん日いないような人気バリバリの最中に解散せんでもええやないか。ケンカでもしたんかいな、これ」

静真「それはないと思いますよ」

次郎「——ふーん。コンサートいつやつた？」

静真「来月、円山公園の音楽堂です」

次郎「そうか。楽しみやなあ。久々、愛するサチちゃんに——あっ！」

静真「はい？」

次郎「そうか、そうかあ。分かったぞお。

会うな、おまえ。コンサート終わってから会う約束してるなサチちゃんど。

どないして連絡とったんや、え、言うてみい」

静真「なにを言うてはるんですか。そんなわけないでしょう。相手芸能人ですよ」

次郎「いや凶星や。そやからエンジェルス解散でも余裕のよっちゃんか。かーっ、たまらんなあ。続きがあったわけや。アイドルいてこますかあ」

静真「勝手に妄想しとってください」

次郎「やるなあ、さすが女殺しの静真やなあ」

ひとりで盛り上がる次郎をよそに、苦笑しながら串を打ち続ける静真。

○円山公園音楽堂（夕方）

二五二八人収容の円山公園音楽堂。

野外の客席はベンチタイプの椅子が扇形に広がっている。前列五席目までは、ハチマキをしてハッピを着た親衛隊が陣取っている。中央あたりのベンチ、端に腰掛ける静真。徐々に客席が埋まっていく。

薄暗くなり、バックバンドのメンバーが登場。指笛、拍手。ドラマーのカウント。

演奏が始まり、客席にいた誰もが立ち上がる。『ラッキークーガールにご用心！』のイントロが最高潮になり、エンジェルスの三人が舞台左袖から駆け足で登場する。大歓声の客席。全員が立ち上がる。早智をじっと見つめる静真。唄出す三人。

× × ×

唄い終え、並び立つ三人。

美子「みなさん、こんばんはー！」

観客「へこんばんはー！」

香奈「あれー、声が小さいぞー！ こんばんはー！」

観客「へこんばんはー！！！」

早智「もつともつと！ こんばんはー！！！」

観客「へこんばんはー！！！！！」

美子「ありがとうございます。エンジェルスです」

三人、深く頭を下げ礼をする。万

雷の拍手。

美子「えー、突然の解散発表、驚かれたことと思います。応援してくださいっているファンの皆様にはたいへん申し訳なく思っています」

香奈「わたしたち、結成したときから決めてたんです。いちばんいい時に解散しようって。その日までわき目もふらず頑張ろうって」

早智「青春の全てをエンジェルズに賭けてきました。そんなわたしたちのわがままを、どうか許してください——全国ツアー最終日、横浜スタジアムが終わるまで、コンサート、テレビ、ラジオ、精一杯、心をこめて歌います！」

深く頭を下げる三人。大きな拍手がわきおこる。頭を上げる三人。

美子「ありがとうございます——わたしたちデビューしてすぐ、キャンペーンでここ、京都にやってきました。東京以外での最初のキャンペーンの地が、京都でした」

香奈「パチンコ屋さんの前とか、スーパーの駐車場とか、レコード屋さんの店先で歌いました。そんなわたしたちが今、伝統のある円山公園音楽堂のステージに立っています」

早智「あの日を忘れたことはありません。思い出の街、大好きな街、ここ京都が最後のツアー出発の地です！ 思い切り歌います！ 今日最後まで楽しんでいってください！」

美子「いくよ！ 『渚のサンシャイン・

ボーイ』！」

イントロが始まり大歓声が沸き起こる。

× × ×
唄い、踊る三人の姿。ずっと早智を見ている静真。

× × ×
ステージは無人。アンコールの音が客席から鳴り響いている。

まずバンドメンバーが現れ、続いてエンジェルズの三人が現れる。客席向かって右から美子、早智、香奈の順で立っている。大歓声。

美子「アンコールありがとうございます」

深く礼をする三人。拍手が起きる。
美子「わたしたち、ステージから見える景色が大好きなんです——意外とはつきり見えちゃうんだよ。みんなの顔」
香奈「うん。京都親衛隊のみんなー、最後までコールリードしっっかり頼むよー！！！」

沸き上がる親衛隊。

美子「わたしたちエンジェルズ、これから解散までに三枚のシングルを発表する予定です。明日発売のその第一弾は、この並びを見てお分かりのとおり、シングル曲で初めてサチがセンターでリードボーカルをとめます」

深く礼をする早智。声援が飛ぶ。

早智「ファンの皆様の前で歌うのは、今日が初めてとなります。ひとりで詞を書きました。聴いてください『シークレット・デート』」

バックバンドがイントロを演奏し始める。

客席の静真、ベンチとベンチの間の通路に立つ。

リズムを刻みながら客席を見渡していく早智。

静真に気づく早智。驚く。ステージの早智、客席通路の静真、見つめあう。静真、微笑んで左手を振る。動かなくなる早智。観客に背を向ける。涙を拭う。

早智の異変に気付いた美子と香奈。
バンドに演奏をやめるよう指示す
る美子。

騒めく客席。

ステージ上で三人が寄り添って話
しをする。客席に目を向ける美子
と香奈。静真を認める。早智の頭
を撫でる美子。両手を握り振る香
奈。涙を拭いながら二人に何度も
頷く早智。

三人、ステージに向き直って。

美子「ごめんなさい。あのですね、サチ
がシングル初センターで感極まっちゃ
ったみたいです」

香奈「なんせセンチメンタル乙女サチな
もんで、許してやって」

笑いと拍手がおきる。うつむいて
いる早智。早智に声援が飛ぶ。早
智、顔を上げて。

早智「ありがとうございます。ごめんなさい。今度
はしっかりと唄います。じゃあ改めて
『シークレット・デート』」

拍手と歓声。バンドがイントロを
奏で始める。

唄い出すエンジェルズ。

エンジェルズ「トラブ・アット・ファー
ストサイト ふたりいっしょに
ハブ・ア・クラッシュユ・オン 恋に落
ちたの 昼下がりの街中

深呼吸 ダイヤル回すの
震える指先 呼吸がはやくなる
初めてよ こんな気持ち
わたし 人見知りなのに

さあ あなたの街へ 行くのよ
ドアが開くの 待ちきれなくて
いま はだしの心で 駆けてく
弾けてしまいうそう この胸

誰にも知られたくない
そうよ 二人のデートはシークレット
ときめきの街 秘密の 秘密の時間

モン・ポー・シュヴァリエ ナイトは

あな
た

デイ・モア・チュメーム？ 手つなぎ
歩くの 朝陽さす街中

肩並べ シネマを観るの
こぼれる涙 あなたに見られてる
初めてよ こんな気持ち
永遠（とわ）に忘れないこの瞬間（と
き）

さあ もっと歩こうこの街
行きかう人の 流れにまかせて
ほら 小指の糸が 見えるわ
ずつつながったまま これから

誰にも知られたくない
そうよ 二人のデートはシークレット
きらめきの街 秘密の 秘密の時間

ねえ ゆびきりしよう 約束の
発車のベル 二人を急かしてる
ねえ 出会えた場所待ってて
強く抱きしめてね 今度は

誰にも知られたくない
そうよ 二人のデートはシークレット
たそがれの街 秘密の 秘密の時間

マイ・スウィーテスト・オンリー・ユ
ー」

生き生きと唄う早智。間奏で静真
を見て、笑顔を見せる。静真、微
笑んで早智を見ている。

曲が終わる。後奏が鳴る中、いつ
たん客席に背を向ける三人。振り
返って最後のポーズ。早智、マイ
クを口元に。通路の静真を見て。

早智「出会えた場所で、待ってて」
微笑み頷く静真。

早智も微笑んで頷く。
曲が終わる。大歓声と拍手。
アップテンポのイントロが鳴り始
め、再び早智は客席向かって左側
へ。

美子「わたしたちを翔びたたせた歌!

『天使の羽音』!」

飛び跳ねる三人。熱狂する客席。

静真に大きく手を振る早智。早智に大きく手を振る静真。

唄い始めるエンジェルズ。

○京都ホテルオークラ・全景(夜)

○前同・宴会場(夜)

立ち飲み形式で、エンジェルズのコンサートの打ち上げが行われている。楽し気に飲み食いしているバックバンドのメンバーやスタッフ、その他関係者たち。

マネージャーである岡崎(39)の前に立つエンジェルズの三人。

美子「岡崎さん」

岡崎「んう、なんだ」

美子「ちょっと夜風に当たってきたいんです。小一時間ほど鴨川べり、散歩して

きて

いいですか」

岡崎「ああ、散歩お? なんだそれ」

香奈「三人で今日の反省会したいんですよ」

よ」

岡崎「んなもの部屋でできるだろうよ」

美子「せっかく京都来たんだから、夜の

鴨川

歩いたっていいじゃないですか」

岡崎「ファンに見つかったらややこしいことになるだろうがよ」

香奈「夜だし、川っぺりだし、そんな人歩いてないから大丈夫ですよ。だいたいわたしたちが普通に歩いてるなんて、だれも思いませんって」

岡崎「——しかたねえなあ。早く帰ってこい

よ」

美子「ありがとうございます。じゃあ、行こ

うか」

岡崎に背を向ける三人。

岡崎「ああ、早智」

早智振り返って。

早智「はい」

岡崎「今日の『シークレット・デート』よかったぞ。ラストのアドリブすげえ決まってたわ。あれ定番にしようや」

早智「ありがとうございます。でも、あれは

今日だけなんです」

岡崎「なんでだよ。あれよかったぞお、ほん

とに」

美子「じゃ、ちょっと行ってきまーす」

岡崎に背を向ける三人。

岡崎「なあ早智。定番にしようや、あれ」

振り向かず宴会場を出ていく三人。

○前同・宴会場を出たところの廊下

かたまっている三人。

早智「やっぱり、ついてくるの」

美子「——うん、残念ながら」

頷く香奈。

香奈「今日の早智、一人にしたら最後まで突っ走る」

早智「そんな、会うだけだよ」

美子「この門限は十二時。それまでに戻ってこれる自信ある?」

早智「あるよ、そんなの」

香奈「もしも高倉君が『部屋に来てほしい』って言ったら?」

ハツとなり、うつむく早智。

美子「そんなことになったら大騒ぎになる。マスコミだっつかぎつける。でしよ?」

美子、早智の頬に手をやる。

美子「解散まで待てなんて言っていない。

ただあんまり急だっって言ってるだけ」

香奈「うん。もうちょっとだけがまんしよ、早智。けど、ほんとにいるかな

彼?」

早智「いる。絶対いる」

強く頷く早智。

○御池通り(夜)

歩道に立っている三人。美子が手を大きく振っている。タクシーが停車する。

○タクシー車内(夜)

美子、早智、香奈の順で後部座席に乗

り込む三人。

早智、運転手の西島(27)に告

げる。

早智「西大路三条の三条会館までお願い

します」

西島「三条会館って、パチンコ屋の？」

早智「そうです」

西島「——はあ」

発車させる西島。

早智の手を握る美子と香奈。二人

の

手を握り返す早智。

× × ×

御池通りを走り続けるタクシー。

西島、バックミラーを直すふりを

して三人をちらちらと見る。

西島「あの〜」

香奈「はい？」

西島「そんなことないって、思うんやけ

ど。もしかして、もしかしてエンジン

ルスの三人とかがっていうこと、ないで

すよね？」

三人、顔を見かわして。クスクス

笑い。

美子「ミコです」

香奈「カナです」

早智「サチです」

美子「三人そろって」

三人「エンジェルズです」

西島「えええ〜っ、なんで〜っ!?

う

っそお〜っ!?」

三人、笑う。

西島「俺、俺、ファンなんっすよお!

レコード全部持ってます! 今日、円

山公園でコンサートをやったんっすよ

ね!? めっちゃ行きたかったんやけ

ど、出番やし……てか、なんでえ!?
ええっ、信じられへん!」

美子、運転手席後部に下げられた

名

札を見て。

美子「西島正幸さん。あなたは今夜カボ

チャ

の馬車の御者です。光栄に思っただ

さ

いね」

西島「えっ、えっ、なんすかそれ!？」

香奈「ねえ西島さん。今日わたしたちが

あなたのタクシーに乗ったこと、誰に

も言わないって約束できる?」

西島「しますっ! 絶対約束します

っ!」

香奈「えー、ほんとなあ。西島さんな

んか

口軽そう」

西島「俺、ほんまに誰にも言いません!

言いませんよ!——あの、カナさん、

俺、口軽そうに見えるっすか……」

香奈「ふふっ。ごめんね西島さん。信じ

るよあなたのこと。あとで住所教えて。

もしずっと黙っててくれたらね、スタ

ッフに頼んで解散コンサートのチケット

贈ってあげる。アリーナ最前列のや

っ」

西島「まっ、まっ、マジっすかああ

っ!？」

香奈「届くのは来年になるかな。お仕事

忙し

そうだけど、大丈夫?」

西島「先だから大丈夫です! 会社に頼

んで、その日は絶対休みにします!」

香奈「横浜まで絶対来てよお、西島さ

ん」

西島「はいっ! 絶対行きます! 俺、

ホントに誰にも言いませんから!——

ふおおっ、俺いま、エンジェルズ乗せ

てるう〜っ!」

御池通りを疾走していくタクシー。

○西大路三条・〈三条会館〉駐車場

(夜)

駐車場に立っている静真。

西大路通りを南からタクシーがやってくる。駐車場の前で止まる。

後部ドアが開き、降り立つ香奈、

早智、美子。美子精算時西島に。

美子「じゃあ西島さん、一時間後に、またここにお願いますね」

西島「はいっ！」

西大路通りを北上して去っていく

西島のタクシー。

静真と早智、向かい合う。

早智「分かってくれたんだ、本気で言ってるって」

静真「そりゃ、分かるよ」

香奈「いたんだねえ、ほんとに」

美子「お邪魔虫ごめんね、高倉さん。ほんとは早智ひとりでここに来させてあげたかったんだけどね」

香奈「ま、お目付け役つてことで。あー、覚えてる覚えてる、ここ。懐かしいー」

早智と静真、見つめあい続ける。

○三条坊町児童公園・入口(夜)

公園の銘板が映る。

○前同・内(夜)

三条会館から歩いてすぐの児童公園。ベンチに座っている静真と早智。少し離れた場所にあるブランコに乗っている美子と香奈。

静真「この匂いがアラン・ドロン？」

早智「え？ あ、うん。ホテル戻ってシヤワー浴びてからまたつけてきた。いつもずっとつけてる。高倉君からもらったのはなくなっちゃったけど、ポトルは大事に残してるんだ」

静真「そうなんだ」

早智「あのさ、ごめんね高倉君」

静真「え、なにが」
早智「前に歌番組でさ、男の人とデートしたことないなんて、言っちゃったことあるんだ」

静真「ああ、それ見てた」

早智「やっぱり見てたんだ。あんなのっ

て、台本があってね、受け答え最初から決まってるの。でもわたしすごく嫌で——高倉君テレビ見てたら絶対怒ってるって。ずっと気になってて」

早智の横顔をじっと見る静真。うつむく。

早智「高倉君？」

静真、うつむいたまま。

静真「そんなん、ずっと、気にしてたんか？」

早智「そうだよ、ずっと気になってた。怒ってる？ 高倉くん」

静真「——なに言うてんのか。そんなん言うたら、俺、俺なんて……俺、年上の、女の人とな……」

早智「年上の女のひとと？」

うなずく静真。

静真「……あんなん、あんなただのアイドルの気まぐれやなんて途中から思ってた……」

早智「気まぐれだったら、わたし今ここにいないよ」

何度もうなずく静真。

静真「ラジオも聴いたんや。あの、アラン・ドロンさんへ、つてやつ」

早智「あれかあ。へへへ、あれもホントは台本。美子と香奈が作ってくれて持ってたんだ。DJの人はホントのアラン・ドロンに言ってるって思ってたけどね。オンエア前にさ、こっちの小指がピクピクしたの。だから、なんか絶対、高倉君、聴いてくれてるって思ってた」

静真の目から涙が落ちる。

静真「聴いてたよ、聴いてた」

早智「——その女の人とは今でも？」

首を横に振る静真。

早智「よかった。でも高倉君、自分のこと、『俺』って言うようになったんだね。なんかかっこいい」

顔を上げ早智を見る静真。微笑んでいる早智。

早智「男の子だもんね。そういうこともあるって、思ってたよ」

静真「吉沢さん——」

早智「今、高倉君わたしの目の前にいる。

それが、あの日から今日までの答え。

それでいいんだよ——でも、会うのちよっとフライングだね。エンジェルスのサチじゃなくなる前に会っちゃった」

静真「うん」

早智「ずっと会いたかった。ずっと、ずっと」

静真「うん」

早智、ブランコの美子と香奈を見て。

早智「ねえー、ちよっとだけ向こう向いててー」

美子「えー、見てない間に二人でどこか行こうとかしてない？」

香奈「ダメ。見てる」

早智「行かない。どこにも行かない。二人の事裏切ったり絶対しない！ だからお願い、ちよっとだけ」

美子「あーあ、仕方ないなあ」

香奈「まあ、こうなることは分かっていたけど」

反対側を向いてブランコに乗る二人。

早智「なによ、バージンなのわたしだけなん

だから、ちよっとくらい、いいじゃない」

静真「そうなんか」

早智「ふふふ。美子は社長の長男で販促係長の友行さんと、香奈はバックバンドのベースのテツちゃんときあつてる——絶対誰にもしゃべっちゃだめだよ、これ」

静真「分かってるよ、そんなん」

早智「美子と香奈だったから続けられた。

解散してもずっと連絡取り合おう、いつしよに旅行とか行こうって言ってるんだ」

静真「仲ええんやな、ほんまに」

早智「うん。三人そろってエンジェルスだもん。それは永遠」

静真「どうするん、横浜スタジアム終わったら？」

早智「うん。とりあえず半年ほど休む。

それからは三十歳くらいまでは芸能界にいて歌のお仕事してもいいかなって思ってるんだけど、でも——」

静真「でも？」

早智「両親にもだいぶお金遺せたからさ。焼き鳥屋の奥さんになるのも悪くないかなって思ったりもしてる」

静真「え——」

早智「解散したら何回も京都来る。マスコミに見つかっちゃった方がいい。そのときはエンジェルスのサチじゃないんだもん」

静真「うん」

早智「ずっとがまんしてきたんだよ、わたし」

静真「うん」

早智「年上の女の人に取りられるのなんていやだ」

静真「うん、ごめん」

早智「そうだよ。わたしはずっと高倉君一筋だったのに。会えなくても一筋だったのに。ひどいよ高倉君」

静真「うん、ほんまにごめん」

早智「ねえ、名前で呼んで」

静真「——早智」

早智「静真」

二人、顔を寄せキスをする。唇を離し。

早智「あの日はほっぺただったね」

静真「うん」

早智「ほんとに、ほんとにわたし今のがファーストキスなんだよ」

静真「うん」

早智「言ってくれないの？」

静真「え？」

早智「『俺の部屋に來い』って」

静真「——それは、今は言えない」

早智、静真をじつと見つめて。微笑み

頷く。

早智「高倉君、全然変わってないね。あのね、十二月にもう一回京都での公演があるの。場所は京都府立体育館」

静真「府立体育館か、すごいなあ」

早智「ねえ、連絡するから、その日の夜は同じホテルにお部屋取って」

静真「——うん、分かった」

早智「絶対だよ。がまんできない夜は、じぶんで慰めてきたんだよ。静真のこと思つて」

静真「うん」

早智「分かつてんの、ほんとに」

静真「うん」

早智「『うん』ばかり」

静真「うん」

早智「あははっ」

二人、また唇を合わせる。激しく口づけ合う。

美子「おーい、まだかあ、長いぞお」

香奈「いいならいいって言ってくれー」

二人の声が聞こえないかのように、静真と早智、抱き合い、むさぼるように互いの唇を求めあい続ける。

○物語冒頭に戻って・ヘバラックへ二階、静真の住んでいた部屋

次郎「早智ちゃん来たときはこの部屋に泊まつてたんやで」

静悠「この部屋に」

次郎「最初のととき静真、そら照れくさそうに言うてきてなあ。あの顔忘れへんなあ」

静悠、二人の写真を見て。

静悠「このお写真はそのときに？」

次郎「ああ、わしが撮ったもんや」

静悠、壁のポスターを見やうて。

静悠「けど、ほんまに色あせてないんやなあ」

次郎「浄雲から聞いたか」

静悠「はい。一回も貼り替えてないんでしょ、これ」

次郎「ああ、静真が当時に貼ったままや。昨日貼ったみたいやろ——何回くらい来たかなあ早智ちゃん。いつもおんなじ運転手のタクシー、店の前に横付けさせてな。あの若い運転手は二人の事知ってた」

静悠「へえ」

●インサート

ヘバラックの前に立っている静真。その前にタクシーが停まる。

降車し、後部座席のドアを開ける

西島。早智が降りる。

見詰めあう静真と早智を微笑んで見ている西島。

静悠「盛大なご葬儀やったようですね。それもこの前動画で観ました」

何度もうなずく次郎。

次郎「なあボン。静真の骨、世話になるときな、隣のお守りも静真の骨壺に入れてええか。中はおんなじ、人の骨やよつて」

静悠「骨——あの、それって」

次郎「うん。早智ちゃんのお骨や。葬式の時、ご両親に頼んで一カケ貰うたそや。それからそないしてお守り袋に入れて、斃れる日まで首から提げてたんや」

静悠「そうですか。はい、分かりました」

次郎「うん、おおきに。けどそれももうちよつと先の話や。まだしばらくはこの二人、このままにしといてやりたいんや」

静悠「したら佐村さんも元気でおられませんかね」

次郎「うん。二人のところに行くのはまだまだ早いわい」

静悠「僕、今晚もエンジェルズ観ますわ。

円山公園音楽堂のコンサートも収録されてますねん。まだ観てへんから、今日はあれ観よ」

次郎「そうか。それ、静真が観に行ったやつや。ボンみたいな若い子に観てもろうて早智ちゃんも喜んでるやろ」

琴絵「静真ちゃんは妬いてるかもね」

笑う三人。次郎の骨壺と早智のお守り袋、ヘアラン・ドロンへの香水に目をやる。

静悠「親父から聞きました。減っていくんでしょ、この香水も」

次郎「うん、そうなんや」

静悠「揮発してるっていうわけでは？」

次郎「にしては勢いが速すぎる。あいつが死んでから、何本買ったか分からん」

琴絵「なくなりかけたら、うちが買いに行くよ」

浄悠「そうですか」

微笑む写真の静真と早智を見つめる次郎、琴絵、浄悠。

○京福電鉄・四条大宮駅前

スマホを弄って人待ちしているマスクをした大学生の結衣（19）。同じく大学生翔太（19）がやってくる。

結衣「翔太おっそーい。待たせるとか信じられないんですけどー」

翔太「うっせーっの」
二人、手をつないで駅構内に入る。

○京福電鉄・車両の中

走っている一両電車。手を繋いで席に座っている結衣と翔太。乗車しているのは老婆がひとり。

結衣「かわいいよねこの電車。通称嵐電って

言うんだよ。名前はけっっこういかつい
け

ど、でもめっちゃかわいい」

翔太「なんでもかわいいって言うよな結衣は」

結衣「そんなことないよ。わたしかわいいものしか、かわいいって言わないからさ。あー、人生初の嵐山だー。楽しみー」

○西大路通り・歩道

手を繋いで歩く静真と早智の後ろ姿。

○京福電鉄・西大路三条駅

停車する車両。ドアが開く。乗客はいない。発車する電車。

○前同・車両内

結衣「あれ？」

翔太「なに、どした？」

結衣「いい匂いする」

翔太「え？」

結衣、マスクを少しはずして。

結衣「うん、やっぱりする」

翔太もマスクを少し外して。

翔太「あ、ほんとだ。鼻いいな結衣。」

結衣「これってさ、アラン・ドロンって香水の匂いだよ」

翔太「は？ なにそれ」

結衣「一番上のお姉ちゃんがつけてた香水なの。だから知ってる」

翔太「ふーん。アラ——なんつった」

結衣「アラン・ドロン。むかしの外国の俳優の名前なんだって」

翔太「へーえ」

結衣「でも、急になんでだろ。不思議だよね」

翔太「あのおばあさんがつけてるとか？」

老婆を見る翔太。

結衣「ありえないでしょ、それ」

笑う二人。その向かいの席に手を繋いで十九歳の静真と早智が座っている。

車両が三条坊町児童公園の前にさしかかる。指をさす早智。笑う静真。

身を寄せ楽しそうに話を続けている翔太と結衣。

身を寄せ楽しそうに話を続ける静真と早智。

嵐山行きの京福電鉄の一両電車が路面を走り続けていく。

了